

ラベ・ピエール

結城 洋一郎

今年（一九二〇年）はラベ・ピエールの生誕一〇〇周年にあたる。

私は長らく、この人のことを全く知らなかった。恐らく、ほとんどの日本人にとっても同様なのではなからうか。

彼は、一九二二年八月、リヨンに生まれた。若くして聖職者を目指し、グルノーブルの教会で神父を勤めていた時に第二次世界大戦が起こり、レジスタンスに参加しながらユダヤ人の救援も行う。本名はアンリ・アントワーヌ・グルエというのだそうだが、レジスタンスで使った偽名が「ピエール」だったため、以後、彼はラベ・ピエールと呼ばれることになるのである。ラベというのは僧職に付される敬称「アベ」に定冠詞を付けたもので、「師」と訳されるのが普通である。さしずめ、「ピエール先生」というくらい感じであろうか。

戦後、彼は国会議員となり、アルベール・カミュやアンドレ・ジッドなどと共に社会運動を続けたが、次第に政治家に失望し、私財を投げ打ってホームレスを救済するため「エマウス」という組織を設立する。これは不用品をリサイクルして救済資金の調達を図るといふ、当時としては画期的なアイデアに立つもので、その運動はフランス全土、世界各地に広がり、彼の名前は世界的に不動のも

のとなった。

その名声の下、彼はあらゆる社会問題に発言し、行動し、弱者のために怒り闘うその情熱は生涯衰えることがなかった。フランス国民はこのような彼を深く敬愛し、毎年行われる人気投票では大統領や各界の著名人を抑えて、常に一位か二位を確保し続けたのである。

私が彼の存在を知ったのは一九九五年のこととて、当時、フランスでは年金改革をめぐって断続的にストライキが繰り返されていた。

これが遂にはフランス史上最大の交通ゼネストに発展するのだが、この時、一人の老人が労働組合に対し、「諸君が最も恵まれない人々の権利を第一に考慮しないならば、諸君の行動は完全な尊厳を保ち得ないであろう。」という意味の声明を発したのである。これを受けて組合は直ちに、政府への要求項目にホームレスの権利擁護などを追加したのであった。

一体この老人は何者なのだろう、という翌年、アフリカ系住民が「滞在許可証」の発給を求めてパリの教会を占拠し、警察官によって排除される事件が起こった。この時、住民側を支援する多くの人々の中にこの老人の姿もあった。マスコミが彼に対し、「イスラム教徒が教会を占拠しているのを、カトリック

の聖職者が支援することについてどう思うか」と質問すると、彼は次のように答えた。

「私は五〇年前のグルノーブルの出来事を思い出す。ある夜、教会の門を叩く者がいた。彼はユダヤ人だった。夜、教会の門を叩く者は、救いの場所を求めているのである。」

奇しくもちょうど一五〇年前、ピクトル・ユーゴーは『レ・ミゼラブル』の中で、教会の銀の食器を盗んだ泥棒に、更に燭台を与える聖職者の姿を描いた。ラベ・ピエールはユーゴーが小説に託した想いを自らの行動で実践するとともに、次のようにも語っている。

「あらゆる法律に先立つ一つの法、すなわち、諸法の法ともいふべき絶対的な法がある。それは、家のない、パンのない、打ち捨てられた一人の人間を救うためには、法律にも立ち向かわなければならぬということである。」

この信念に基づいて、彼はアメリカの横暴やイスラエルの蛮行に対しても臆することなく抗議し続けたのであった。

一人の人間の尊厳を守るためには、単なる多数派の決定や強者の意思に身を寄せることなく、場合によっては法律にさえも立ち向かうこと、これが民主主義の精神であることを、彼は言葉と行動によって教えてくれるのである。

その風貌から「思索するヒーバー」と愛称され、その直情径行の性格から「怒れるラベ・ピエール」と形容された彼は、二〇〇七年一月、パリで九四年間の誇るべき生涯を閉じた。

△ゆうき よういちろう・小樽商科大学教授